

# 誘発線法の反応特徴に関する研究 — MMPI, SDS, 印象評価との関連を通して —

目白大学人間社会学部 田中 勝博  
目白大学人間社会学部 今野 裕之

## 【要約】

誘発線法は、中井久夫によって考案されたユニークな投影描画法であり、クライアントと治療者双方に負担があまりかからず簡便に実施できるため、描画療法の導入や心理療法に幅広く用いられている。現在は4つの定型刺激を用いる神戸大パターンの実施法が定着している。本研究では、誘発線法における反応特徴をつかむために、大学生150名（男子50名、女子100名）に、誘発線法と併せてMMPI, SDS, 自己認知質問紙を同時に実施して、描画内容をコード化して分類し、質問紙との比較検討を行った。また、描画表現の印象分析も行い、MMPIとSDSとの比較検討を行った。

本研究において、誘発線法は、それぞれの刺激図を完成図形のある一部もしくは全体としてとらえ、その完成図形を発見するためのイメージ作業であり、各刺激パターンがもたらすイメージをどのように消化するのかという課題特徴があると考えられた。また、誘発線法の各刺激図における出現しやすい反応内容や反応形態、刺激図に対する嫌悪難易傾向などの一般的特徴があきらかになった。誘発線法の簡便な反応分類によって、他の質問紙や印象評価と比較検討できることがわかった。これらの結果について、臨床的見地から考察を行った。

キーワード：誘発線法, 投影描画法, ミネソタ多面的人格検査 (MMPI), 自己評価式抑うつ尺度 (SDS), 印象評価

## I 問題と目的

投影描画法における人格査定の研究は、深田(1972, 1980)や青木(1979)らによれば、描画の発達段階が研究された1885年から1926年までの描画初期研究の時期から描画を用いた知能テストDAM (Draw-A-Man Test)の研究の時期を経て、HTPテストやバウム・テストなどが生み出された1940年代後半の時期にその起源が求められる。投影描画法は、現在、数多くのさまざまな技法が考案されている。しかし、投影描画法についての客観的評価や解釈基準に関する研究は少なく、その信頼性や妥当性について多くの批判がなされている。青木(1979, 1980a, 1980b)は、このような批判に対して文献研究と自らの実証研究によって、投影描画法が臨床的に有効な方法であることを論証している。投影描画法は、画用紙と鉛筆だけの簡単な用具で行える実施の容易さ、言語能力に依存しない非

言語性による導入のしやすさ、実施への抵抗の少なさ、反復実施しやすいなどの特徴をもっているため、現在でも心理臨床の多くの現場で活用されている。投影描画法の優れた技法の一つに、中井久夫の考案した誘発線法がある。

誘発線法は、中井の学会での「省略ぬり絵法」の発言に端を発し、日大グループの臨床家が実践を始めたことに由来する。後藤・中井(1983)がそれらの臨床実践を10数年後に論文化して6つの刺激パターンと4つの刺激パターンの二技法を公表した。その後、中井の指導のもとで神戸大グループが実践を重ね発展させた4つの定型刺激を用いる神戸大パターンが、現在、一般的に定着している(松井ら, 1990)。誘発線法の利点について、後藤ら(1983)は、臨床事例の考察から、「平易性」「侵襲度の低さ」「自由な連想への余地」「治療関係の穏やかさをもつこと」などを指摘している。同様に、松井ら

(1990, 1991) も、この技法を「絵画療法の主力」として用いるなかで、その特徴を「穏やかな交互性」「軽やかな即興性」「拡大しやすい言語交流性」と共に、「侵襲性の低さ」をその利点の大きな特性として挙げている。筆者らの一人である田中 (2001) も、スクイグルなどの描画療法の導入のきっかけとして、誘発線法を用いることの有効性について述べている。

誘発線法は発表までに 10 数年、さらにその後 20 数年臨床現場で使用されており、その臨床的有効性は経験的に実証されているといえる。しかし、これまで発表されている研究は臨床事例に基づいたものが多く、数量的データを分析した実証的研究は、高田ら (1992, 1994, 1995,) の一連の基礎研究、誘発線法の分類基準を試みた松田 (1997) の研究、ロールシャッハテストとの関連をみた寺沢ら (1992) や松井 (1990) の研究など数が少ない。田中 (1993) は、スクイグルの描線のやりとりにおいて、クライアントの描線に対する反応が一定のパターンを示す場合があることを見だし、その経験にもとづいて、スクイグルよりも単純な刺激描線である誘発線法には一定の反応パターンが認められるのではないかという予測から、誘発線法の反応分類を試みている (関谷ら, 2004)。その結果、誘発線法の各刺激パターンがそれぞれ誘発しやすい反応内容が存在すること、さらに刺激描線に対する反応にもいくつかの形態が存在することを見いだしている。

本研究では、関谷・田中 (2004) の研究をもとに、ミネソタ多面的人格検査 (以下 MMPI と略す) の病理指標、自己評価式抑うつ尺度 (Self-rating Depression Scale, 以下 SDS と略す)、自己認知などのデータと誘発線法の描画反応とを比較検討することで、誘発線法の反応内容や反応パターンの病理指標との関連を調べ、その反応特徴を把握することを目的とする。また、誘発線法の描画反応とその印象評価との関係についても比較検討を行い、誘発線法の描画反応の受け取りの方について考察してみた。

## II 方法

1 調査対象 大学生 150 名 (男子 50, 女子 100)

### 2 刺激パターン版の作成

4 つの刺激パターンの誘発線パターンは神戸大パターン (図 1) をモデルに、用紙を 3×3 に分けた中央部分に手描きしたものを原版として、B 5 サイズの OA 用紙に印刷して使用した。描線は 1.6 mm のボールペンを使用した。

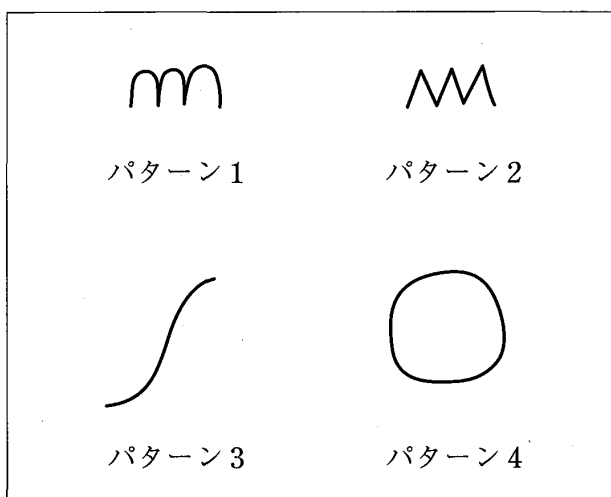


図 1 誘発線法・神戸大パターン  
(松井・中井ら, 1990) より

### 3 実施方法 集団法による実施

誘発線法施行と同時に質問紙を配布した。誘発線法の実施手順と教示は、パターン 1 から一枚ずつ描画するよう教示した。誘発線法施行後、誘発線法調査シートおよび MMPI, SDS, 自己認知の各質問紙に回答させた。MMPI は、被験者の負担を考慮して全項目を実施せず、L 尺度、K 尺度、第 4 尺度の精神病質的偏倚、第 6 尺度のパラノイアの計 115 項目を使用した。自己認知の質問項目は、長島ら (1966) および田中ら (1992) をもとに作成した SD 法 5 件法による 15 項目を使用した。誘発線法調査シートの内容は、年齢、性別、描画内容に関する質問、刺激パターンの好悪難易に関する次の 4 項目、①もっとも好きなパターン、②もっとも嫌いなパターン、③もっとも難しかったパターン、④もっとも易しかったパターン、について調査した。

### 4 分類定義

関谷・田中 (2004) の先行研究をもとに反応内容の分類とその定義を一部修正して作成し、

(1)描画内容、(2)刺激パターンへの反応形態、(3)画面構成様式の3つの観点で分類した。描画内容の分類およびコード化にあたって、田中ら(2003)の卵画・洞窟画定義の分類項目を参考に作成し、最終的に6カテゴリー(人間、動物、植物、自然・天体、物体、その他)に絞った。また、筆圧についても、弱、中、強の3段階で評定した。

### (1) 描画内容

反応内容を、主反応と副反応とに分けて分類し、それぞれ集計した。主反応は刺激パターンに対する直接的な描画反応であり、副反応は主反応を理解するためのその他の描画表現(複数個存在する場合がある)とした。分類カテゴリーは以下の6つに絞った。

- ①人間反応(人間全身反応・人間部分反応・人型キャラクター反応・人型形体反応など)
- ②動物反応(動物全身反応・動物部分反応・動物キャラクター反応・動物形体反応など)
- ③植物反応(草反応・花反応・果実反応・樹木反応)
- ④自然・天体反応(自然の物体:岩石・大地反応・天体反応など)
- ⑤物体反応(人工物:道具反応・建物反応・遊具反応・乗物反応、食物反応など)
- ⑥その他(記号反応・文字反応・模様反応など)

### (2) 刺激パターンへの反応形態

刺激パターンである線刺激をどう描画に取り込んでいるか、描線に対する反応形態。

- ①輪郭反応:形態を構成するために、モチーフの輪郭の一部または全体の輪郭として刺激線を使用したもの、あるいは刺激パターンに寄

り添うように、平行な描線を加えてモチーフを構成するような寄り添い反応。

- ②線分反応:亀裂・噛合わせ・線分等を表現するために、刺激線をそのまま使用したもの。
- ③シンメトリー反応:刺激描線に対してシンメトリー描線反応によって形態を作る反応
- ④無変化:刺激線に何も手を加えず、刺激線自体を何かに見立てているもの。
- ⑤その他

(3) 画面構成様式:描画を一つの場面として認識させ成り立たせている反応様式

- ①単体線画様式:刺激パターンを取り込んだ線画で、画面上に主反応となるモチーフのみが表現されている画面構成。記号・モチーフの付加がないもの。
- ②絵画付加様式:付加反応として、何らかのモチーフが描かれた画面構成様式。(場面描写・イメージ列挙・同族描画など)
- ③説明付加様式:モチーフの動きや状態の表現のために、漫画記号や文字を付加したもの。(擬人表情・記号・言語・陰影など)

## 5 印象分析

誘発線法によって描かれた描画反応について、描画を受け取る側がどのような印象を受けるかを測定するために、今村(2004)、神宮(1996)、長島ら(1966)、田中ら(1992)をもとにSD法による20項目の印象分析項目表を作成した(表1)。

調査終了の後、誘発線法の描画反応に対して、印象評価を5件法によって評定した。評定は、筆者らの一人で絵画療法が専門の田中が中心となり、田中のゼミで絵画療法を学んでいる大学院生4名と共に行った。

表1 誘発線法の印象評価

1. 個性的な—ありふれた	11. 陽気な—陰気な
2. はっきりした—ぼやけた	12. 暖かい—冷たい
3. 明るい—暗い	13. 活発な—おとなしい
4. 深い—浅い	14. 理性的な—感情的な
5. 好きな—嫌いな	15. やわらかい—かたい
6. 濃厚な—あっさりした	16. 良い—悪い
7. 複雑な—単純な	17. 軽やかな—重々しい
8. 優しい—きびしい	18. 繊細な—粗野な
9. 動的な—静的な	19. 強い—弱い
10. 面白い—つまらない	20. 現実的な—空想的な

### Ⅲ 結果

#### 1 反応数および反応内容、刺激パターンへの反応形態

##### (1) 反応数および反応内容

4つの刺激パターンに対する総反応数の平均を求めたところ、パターン1が1.61 (SD = .96)、パターン2が1.65 (SD = 1.18)、パターン3が1.67 (SD = 1.05)、パターン4が1.59 (SD = 1.03)であった。総反応数について刺激パターン間に差異があるかどうか確認するため、刺激パターンの種類を被験者内要因とした一要因の分散分析を行ったが、有意差は認められなかった。また、総反応数の性差を検討したところ、パターン4のみで有意差が認められ、女性の反応数が多かった ( $t(148) = 2.03, p < .05$ )。4つの刺激パターンに対する主反応の内容を表2に示した。

パターン1では人間、パターン2では物体(人工物)、パターン3では動物や物体、パターン4では物体があらわれやすい、というように刺激パターンによって主反応の内容は異なっていた。反応内容について性別にクロス集計し $\chi^2$ 検定を実施したが、有意差は認められなかった。

刺激パターンに対する評価の頻度をみると(表3)、好きな刺激パターンにはパターン4が、嫌いな刺激パターンにはパターン2が、簡単な刺激パターンはパターン3が、難しい刺激パターンはパターン4が挙げられる傾向が認められた。

##### (2) 刺激パターンへの反応形態

各刺激パターンに対する反応様式の頻度を表4に示した。特徴的な結果は次の通りである。①輪郭反応の頻度が高く、とりわけパターン1(70%)とパターン4(81%)で輪郭の頻度が高くなっていた。②輪郭(寄り添い)反応はパターン3(29%)に特徴的な反応であった。③線分反応は、パターン1(2%)とパターン4(1%)では少ないが、パターン2(24%)とパターン3(26%)では多くなっていた。④パターン4ではシンメトリー反応が皆無であった。

##### (3) 画面構成様式

各刺激パターンに対する付加反応の頻度を表5に示した。いずれの刺激パターンにおいても単体線画反応が多く、説明付加反応は少なかった。

た。

次に、付加反応の種類を独立変数とし、パーソナリティ変数(精神病質的偏倚, パラノイア, うつ)を従属変数として一要因の分散分析を行ったところ、いずれの刺激パターン、いずれのパーソナリティにおいても有意差は認められなかった。

##### (4) パーソナリティと刺激パターンに対する反応の関連

刺激パターンに対する反応とパーソナリティの関連について検討するため、はじめに、MMPIの精神病質的偏倚傾向およびパラノイア傾向を取り上げた。MMPIのマニュアルに従って得点化した。総反応数とパーソナリティの関連については、パラノイア傾向とパターン3の総反応数との間にごく弱い正の相関が認められた ( $r = .20, p < .05$ )のもの、他の変数間には有意な関連は認められなかった。反応内容とパーソナリティの関連については、反応内容のうち頻度の少ない“植物”カテゴリーを“その他”に併合した後、反応内容の分類を独立変数、パーソナリティ得点を従属変数とした分散分析を行った。その結果、いずれの刺激パターンにおいても有意差は認められなかった。次に、刺激パターンへの反応様式について、頻度の少ない反応様式カテゴリーを併合した後に独立変数と見なし、パーソナリティ変数(精神病質的偏倚, パラノイア, うつ)を従属変数として一要因の分散分析を行ったところ、いずれの刺激パターン、いずれのパーソナリティにおいても有意差は認められなかった。

刺激パターンに対する評価との関連については、「好き」「嫌い」「簡単」「難しい」の各評価ごとに、いずれの刺激パターンを回答しているかによってパーソナリティが異なるかどうか、分散分析を用いて検討した。その結果、「好き」「嫌い」「簡単」評価では有意差は認められなかったものの、「難しい」の評価においては有意差が認められた(精神病質的偏倚  $F(3,140) = 3.82, p < .05$ ; パラノイア  $F(3,140) = 3.04, p < .05$ )。多重比較の結果、精神病質的偏倚傾向、パラノイア傾向いずれにおいても、パターン4を難しいとする者よりもパターン1を難しいとする者の得点が高かった。

表2 各刺激パターンに対する反応内容の頻度 (n = 150)

	パターン1		パターン2		パターン3		パターン4	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
人間	72	48.0	31	20.7	25	16.7	27	18.0
動物	23	15.3	16	10.7	42	28.0	15	10.0
植物	3	2.0	13	8.7	1	0.7	12	8.0
自然・天体	10	6.7	21	14.0	13	8.7	31	20.7
物体(人工物)	40	26.7	62	41.3	44	29.3	53	35.3
その他	2	1.3	7	4.7	25	16.7	12	8.0

表3 刺激パターンに対する評価の頻度 (n = 150)

	好きな刺激パターン		嫌いな刺激パターン		簡単な刺激パターン		難しい刺激パターン	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
パターン1	26	17.3	43	28.7	26	17.3	47	31.3
パターン2	23	15.3	61	40.7	42	28.0	10	6.7
パターン3	38	25.3	32	21.3	54	36.0	33	22.0
パターン4	62	41.3	13	8.7	27	18.0	59	39.3

表4 刺激パターンへの反応形態の頻度 (n = 150)

	パターン1		パターン2		パターン3		パターン4	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
輪郭	105	70.0	76	50.7	37	24.7	122	81.3
輪郭(寄り添い)	1	0.7	8	5.3	44	29.3	5	3.3
線分	3	2.0	36	24.0	39	26.0	1	0.7
シンメトリー	17	11.3	14	9.3	18	12.0	0	0.0
無変化	23	15.3	13	8.7	10	6.7	21	14.0
その他	0	0.0	0	0.0	1	0.7	0	0.0

表5 各刺激パターンに対する付加反応の頻度

	パターン1		パターン2		パターン3		パターン4	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
単体線画	90	60.0	93	62.0	89	59.3	95	63.3
絵画付加	41	27.3	40	26.7	33	22.0	34	22.7
説明付加	18	12.0	14	9.3	27	18.0	20	13.3

### (5) うつ傾向と刺激パターンに対する反応の関連

うつ傾向について得点化した後、刺激パターンに対する反応との関連を検討した。

総反応数とうつ傾向の関連については、パターン1の総反応数との間にごく弱い正の相関が認められた ( $r = .19, p < .05$ ) もの、他には有意な関連は認められなかった。反応内容との関連については、反応内容のうち頻度の少ない“植物”カテゴリーを“その他”に併合した後、反応内容の分類を独立変数、うつ傾向得点を従属変数とした分散分析を行った。その結果、いずれの刺激パターンにおいても有意差は認められなかった。

刺激パターンに対する評価との関連については、「好き」「嫌い」「簡単」「難しい」の評価ごとに、いずれの刺激パターンを回答しているかによってうつ傾向が異なるかどうか、分散分析を用いて検討した。その結果、「嫌い」「簡単」「難しい」の評価では有意差は認められなかったものの、「好き」の評価においては有意差が認められた ( $F(3,142) = 4.01, p < .01$ )。多重比較の結果、パターン2を好きと評価する者よりもパターン3を好きと評価する者の方がうつ傾向が強かった。

## 2 第三者による印象評定の因子分析

### (1) 印象評定項目の因子分析結果

描画に対する印象評定の20項目に対して、因子分析を行った。今回、150名の対象者が4つの刺激パターンに対して絵を描き、その各々の描画反応に対して20項目で印象評定を行っている。したがって、これらは対象者150名×刺激パターン4種×評定項目20項目からなる3相データであるが、3相データの因子構造を検討するための信頼できる手法は今のところみあたらない。そこで、刺激パターンの要因をつぶし、対象者および刺激パターンが600レコードあるものとして評定項目20項目に対する因子分析を実施した。主因子法で因子を抽出したところ、固有値1以上の因子数は4であったが、固有値の推移およびバリマックス回転後の因子解釈の明瞭性の観点から因子数を3と判断した。回転後の分析結果を表6に示した。

第1因子は、「陽気な—陰気な」「明るい—暗

い」など明るさに関する項目と「暖かい—冷たい」「優しい—厳しい」など情緒的暖かさに関する項目、さらに「良い—悪い」「好きな—嫌いな」といった評価に関する項目が高い負荷を示している。この因子は描画の善し悪し、すなわち評価を示す軸と考えられる。そこでこれを評価性の因子と命名した。第2因子は、「複雑な—単純な」「深い—浅い」「濃厚な—あっさりした」に対する負荷量が高い。これらの項目は描画の指し示すものが複雑かどうかを示す項目と考えられることから、複雑性の因子と命名した。第3因子については「動的な—静的な」が高い正の負荷を示し「現実的な—空想的な」「理性的な—感情的な」は高い負の負荷を示した。すなわち、第3因子は描画に情緒的な力動性が現れているかどうかを分ける軸と考えられ、力動性と命名した。

以上の因子分析の結果に基づき、以後の分析には各因子の因子得点を用いることにした。

各因子の性差を検討するために、男女間で各因子得点のt検定を行ったところ、パターン1の評価性 ( $t(148) = 3.16, p < .01$ )、パターン2の複雑性 ( $t(148) = 2.01, p < .05$ )、パターン3の評価性 ( $t(148) = 5.31, p < .01$ )、パターン4の評価性 ( $t(148) = 3.74, p < .01$ ) に有意差が認められ、いずれも女性の得点が高かった。

### (2) 刺激パターンによる印象評定の差異

刺激パターンの種類によって描画の印象評定が異なるかどうか検討するため、刺激パターンの種類を被験者内要因の独立変数とし、印象評定の各因子得点を従属変数とした分散分析を行った。評価性 ( $F(3,447) = 6.61, p < .001$ )、複雑性 ( $F(3,447) = 3.24, p < .05$ ) については有意差が認められたが、力動性については有意差はなかった。評価性について多重比較を行ったところ、パターン1とパターン2、パターン4とパターン2、パターン1とパターン3の間に有意差が認められた。すなわち、パターン1はパターン2より、パターン4はパターン2より、パターン1はパターン3より評価性が高かった。複雑性については、パターン3とパターン1、パターン3とパターン4の間に有意差が認められ、パターン3はパターン1より、パターン3はパターン4より複雑性が高かった。

表6 印象評定項目についての因子分析結果

項目	評価性	複雑性	力動性	共通性
陽気な—陰気な	.86	.09	.24	.81
明るい—暗い	.85	.04	.10	.73
暖かい—冷たい	.83	.16	.20	.75
良い—悪い	.81	.23	-.14	.73
優しい—きびしい	.80	.04	.01	.65
軽やかな—重々しい	.77	-.03	.04	.60
やわらかい—かたい	.73	.05	.15	.56
好きな—嫌いな	.73	.27	-.05	.61
はっきりした—ぼやけた	.48	.08	-.05	.24
活発な—おとなしい	.47	.29	.43	.49
複雑な—単純な	.06	.80	.04	.64
深い—浅い	.02	.81	-.07	.67
濃厚な—あっさりした	.00	.76	.10	.58
面白い—つまらない	.40	.68	.25	.68
繊細な—粗野な	.30	.63	.00	.49
個性的な—ありふれた	-.01	.56	-.04	.31
動的な—静的な	.32	.37	.55	.54
実的な—空想的な	.07	-.07	-.61	.38
理性的な—感情的な	-.04	.10	-.77	.61
強い—弱い	.07	.20	.09	.05
寄与	5.93	3.48	1.70	11.11
寄与率 (%)	29.65	17.41	8.51	55.57

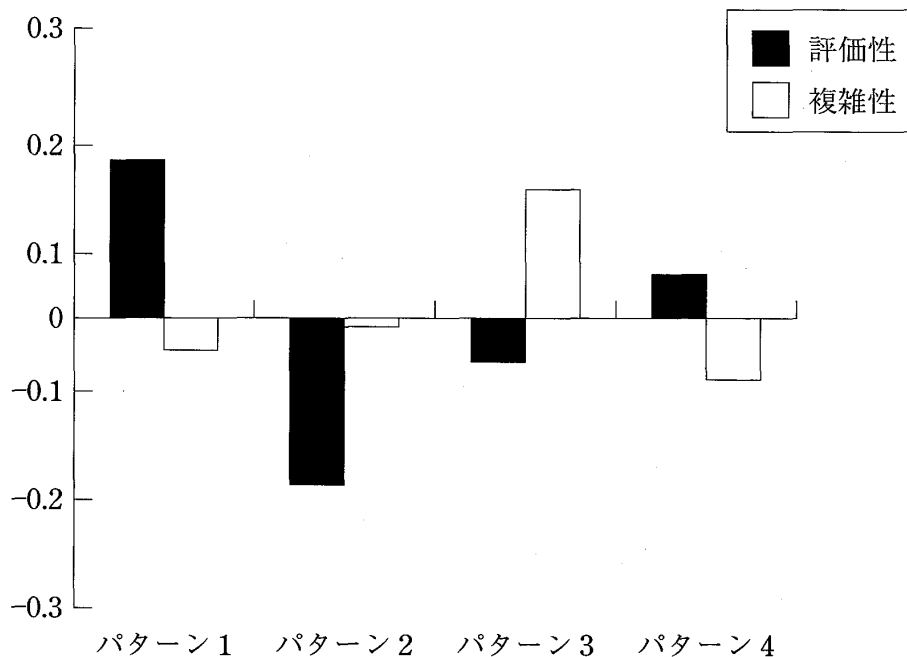


図2 刺激パターンごとのイメージ評定の差異

(3) パーソナリティとの関連

描画の印象評定とパーソナリティの関連について検討するため、MMPIのマニュアルに従って得点化した後に、印象評定の因子得点との相関を求めた(表7)。その結果、有意な相関が認められた変数は少なかったものの、パラノイア傾向とパターン1の複雑性 ( $r = .14, p < .10$ )、パターン2の複雑性 ( $r = .24, p < .01$ )、パターン3の複雑性 ( $r = .18, p < .05$ )の間には正の相関が認められた。すなわち、パラノイア傾向が高い者の描画ほど、“複雑、深い、濃厚”との判断がされやすい傾向が認められた。

(4) うつ傾向との関連

うつ傾向については先行研究に従って得点化した後に、印象評定の因子得点との相関係数を求めた(表7)。その結果、パターン1の複雑性 ( $r = .28, p < .01$ ) およびパターン2の複雑性 ( $r = .22, p < .01$ )との間に正の相関が認められた。すなわち、うつ傾向が高い者ほど、パターン1およびパターン2の描画が“複雑・深い・濃厚”と判断されやすい傾向があった。

IV 考察

1 反応数と反応内容、刺激パターンの評価、反応形態

刺激パターンに対する反応数や反応内容には有意差が認められなかったが、総反応数の性差において、パターン4のみに有意差が認められ、女性の反応数が多くなっていた。このことは、高田ら(1994)の先行研究における、女性が曲線に対して誘発されやすい傾向があるという結果と一致している。また、刺激パターンに誘発されやすい主反応の描画内容が、パターン1では人間、パターン2では物体(人工物)、パターン3では動物や物体、パターン4では物体というように、刺激パターンの形態によって異なるカテゴリーの反応を誘発しやすいことがわかった。このことに関して、松井ら(1991)が「病者の反応が、パターンから直ちに連想される『平凡反応』を示しやすい」と述べているように、この結果は、単純な刺激線を与えて描画させる誘発線法がごく当たり前の描画反応を生じやすいという性質を反映しているといえよう。

刺激パターンに対する好悪難易の評価では、好きな刺激パターンにはパターン4、嫌いな刺

表7 パーソナリティと印象評定の関連

	精神病質的偏倚	パラノイア	うつ
<パターン1>			
評価性	.00	.09	0.01
複雑性	.00	.14 <sup>+</sup>	0.28**
力動性	.04	.01	-0.05
<パターン2>			
評価性	-.11	-.04	0.04
複雑性	.09	.24**	0.22**
力動性	-.09	-.05	-0.03
<パターン3>			
評価性	-.01	.07	-0.01
複雑性	.07	.18*	0.10
力動性	.02	.06	0.05
<パターン4>			
評価性	-.02	.03	-0.02
複雑性	.03	.12	0.19
力動性	.00	.00	-0.07

<sup>+</sup>: $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$



激パターンにはパターン2, 簡単な刺激パターンはパターン3, 難しい刺激パターンはパターン4が挙げられる傾向が認められた。結果を詳しく見てみると, パターン1は, 松井ら(1990)が「導入の役割を担い, 反応しやすく反応への抵抗の低いものが望ましく, その点で適当と見なしてきた」と述べているものであるが, 「嫌い」と「難しい」と答えた者がそれぞれ30%ほどいる。また, 松井ら(1990)が「最も侵襲性の高い」と述べているパターン2は「嫌い」が40%以上あり妥当な数値であるが, 「好き」や「簡単」もそれぞれ15.3%と28%ある。流線型のパターン3の反応は, いわゆる「らくがき」にちかい描線であり, どのような形にも変形しやすいため, 好悪難易の数値が適当に分かれていて, パターン3の描線への感じ方がさまざまであることがわかる。刺激パターン1, 2, 3の反応結果がわかれているのが非病者の特徴と考えられる。

特に興味をひくのは, 終結を象徴するとされている円形のパターン4の結果である。好きな形態として選ばれていると同時に, 難しい形態としても選ばれており, 誘発線法の4つのパターンの中で, 最も両価的な反応を引き起こしている。これは, おそらく, パターン4のみが円という完成した閉じた図形であるために, 他の3パターンの刺激描線と比べると見立てや付け加えになどよる変化や変形を許容しにいためではなかろうか。このパターン4は, 安定している円という形態への好感的な気持ちをもたらすと同時に, 完成しすぎていて変化させにくい自由度のない印象を生じさせると考えられる。自由度のなさを考えると, 子どもの臨床など病者の年齢やタイプによっては, パターン4も他の3パターンと同じく開かれた部分図形の方が望ましい場合があるかもしれない。

各刺激パターンに対する反応形態は, 輪郭反応の頻度が高く, とりわけパターン1(70%)とパターン4(81%)における輪郭の頻度が高かった。パターン4は, 刺激パターンそのものがすでに閉じた完成形の円なので, 顔などの輪郭としてそのまま利用しやすい形態のため輪郭反応が多いと考えられる。その他の刺激パターンでも輪郭反応の刺激取り込み形態が多いこと

は, 関谷ら(2004)の結果とも一致し, 誘発線法の刺激パターンが「描きかけ」の線として認知されやすいためだと考えられる。線分反応が, パターン2とパターン3で多くなることは, この2つの曲線そのものが分割的イメージ記憶を刺激する形態を有しているためであろう。

前述したように, パターン3の形態は, 流線型で「らくがき」にちかい描線であり, どのような形にも変形させやすいため, 反応形態も他の刺激パターンよりもさまざまな反応を生じさせている。また, 輪郭の寄り添い反応やシンメトリー反応を生じやすいことは, この図形のもつ流線型の形態が, 一本の線を描き加えることで単純な線分である刺激パターンから何かの形態(ゾウの鼻, 髪の毛など)を連想させ誘発させやすいからだと考えられる。

パーソナリティと刺激パターンに対する反応との関連については, 反応数や反応内容では有意な関連は認められなかったが, 刺激パターンに対する好悪難易では「難しい」の評価において有意差が認められ, 精神病質的偏倚傾向, パラノイア傾向いずれにおいても, パターン4を難しいとする者よりもパターン1を難しいとする者の得点が高くなっていた。誘発線法の4つの刺激パターンについては, 松井ら(1990)が, 「4つのパターンはそれぞれ『起』『承』『転』『結』として理解される」と述べているが, 精神病質的偏倚傾向やパラノイア傾向の高い者が誘発線法の導入であるパターン1を難しいと感じやすいのは, 初めての体験の始まりや新しいものとの出会いに抵抗を感じやすい傾向を示しているように思われる。

また, うつ傾向と刺激パターンに対する反応の関連でも, 総反応数や反応内容については有意な関連は認められなかったが, 刺激パターンに対する好悪難易評価の分析の結果, 「好き」の評価において有意差が認められ, パターン2を好きと評価する者よりもパターン3を好きと評価する者の方がうつ傾向が強かった。この結果は, うつ傾向のある者は先端恐怖を感じやすい傾向のあることが言われていることを考えると, 当然の結果と考えられる。

以上のことより, 誘発線法は, 関谷ら(2004)が指摘しているように, それぞれの刺激パター

ンを完成図形のある一部もしくは全体としてとらえ、その完成図形を発見するためのイメージ作業であり、各刺激パターンがもたらすイメージをどのように消化するのかという課題特徴があると考えられる。このことについて、松井ら(1991)も誘発線法のもっとも重要な特徴として、「ロールシャッハテストでいう部分反応はありえず、刺激パターン全体を一部とするような反応が期待されること」を挙げ、「誘発線法においては、『全体反応』的把握と『部分反応』的把握という二つのイマジネーションが結合され、協力しあって反応に結実する」と指摘している。

## 2 誘発線法の反応に対する印象評定

描画に対する印象評定の20項目の因子分析で得られた3因子(評価性の因子、複雑性の因子、力動性)の性差において4つの刺激パターン全てに有意差が認められ、いずれも女性の得点が高かった。また、刺激パターンの種類による描画の印象評定の違いについて検討した結果、評価性と複雑性について有意差が認められた。多重比較の結果、パターン1はパターン2とパターン3より、パターン4はパターン2より評価性が高くなっていた。複雑性については、パターン3はパターン1とパターン4より複雑性が高くなっていた。これは、高田ら(1994)の研究において、「女性は柔らかさ、優しさ、女性的なイメージ」の描画表現の特徴をもち、男性は「攻撃性がストレートに表現」される傾向があると指摘しているが、男性よりも女性の描画の巧緻性が高い傾向や女性的な優しいイメージなどが印象評価される時に高く評価されやすい傾向があるためと考えられる。刺激パターンによる印象評価に違いが認められたことは、上述した各刺激パターンによって誘発される内容に違いがあるという刺激描線のもっている特徴によるところが大きいといえよう。

描画の印象評定と病理指標との関連についての分析結果では、MMPIのパラノイア傾向と刺激パターン1, 2, 3の複雑性との間に正の相関が認められ、パラノイア傾向が高い者の描画ほど、「複雑、深い、濃厚」との判断がされやすい傾向があった。うつ傾向についても、印象評定の因子得点との相関係数を求めた結果、刺

激パターン1, 2の複雑性との間に正の相関が認められ、うつ傾向が高い者ほど、パターン1およびパターン2の描画が「複雑・深い・濃厚」と判断されやすい傾向があった。この結果は、松井ら(1991)が提示した「誘発線法における逆説的描画傾向」と異なる結果である。松井ら(1991)は、精神科患者と非病者の誘発線法を比較し、病者の病理傾向と描画反応とはロールシャッハテストの内容分析とは対照的な逆説的描画傾向があったと述べている。すなわち、誘発線法における描画反応は、「病者の反応が、パターンから直ちに連想される『平凡反応』であり、非病者の方が『ひねった』反応になる傾向」があり、決してその逆はないと述べている。

本研究の印象評価の結果と松井ら(1991)との結果の違いはどこから来るのであろうか。問題点の一つとして、実施方法と被験対象の違いが考えられる。筆者らの実施方法は簡便な集団法によるものであり、個別法である神戸大方式の手続きを厳密には取っていない。この集団による実施に関して、松井ら(1991)は、臨床場において、「実施不可能ではないにしても、実施困難であり、治療的意義」が見いだしにくいことを指摘している。また、筆者らの被験者は全て非病者の大学生であり、その中での病理傾向の高い者と低い者を比較していることも、松井ら(1991)の病者群との比較結果と異なっているのかもしれない。問題の二つめは、印象評価や反応分類の精度やそれのもつ限界、描画判定熟練度や臨床歴の均一性などの評価者の問題、これら評価方法の精度の問題が考えられる。

作成した印象評価は、客観的評価法として、筆者らには投影描画法判定の使用に耐えうる手応えをもったが、青木(1980)の指摘しているように、複数判定による一致度、再検査法による吟味などによって印象評価内容と判定精度を高めることや、内容分析についても松田(1997)の分類項目などを加味するなど、複数の指標による評価を考慮していく必要がある。ただ、松井ら(1991)の「逆説的描画傾向」の仮説を一点だけ批判するならば、筆者らの経験では、病者のみならず非病者も共に、ごく平凡な描画反

応をもたらすのが誘発線法の特徴だと思われることである。今回の調査において、病理性が高い者が複雑な描画だと評価されやすい傾向があるという結果については、今後、調査の精度や統制度を高めて検証していく必要がある。

### 3 今後の課題と展望

本研究において、誘発線法の各刺激パターンにおける出現しやすい反応内容や反応形態、刺激パターンに対する嫌悪難易傾向などの一般的特徴があきらかになった。また、誘発線法の簡便な反応分類を行うことによって、他の質問紙や印象評価と比較検討できることがわかった。

誘発線法のもつ臨床的利点は、やはり松井ら(1991)が指摘しているように、「誘発線法の誘発パターンは病者における『平凡性』を全面に出す特性をもっている」ことだといえよう。そのことについて、松井ら(1991)は、「誘発線法は病者の病理についてはロールシャッハテストほど多くを教えないであろうが、病的なものを誘発しない安全性」を有していると述べている。その誘発線法の安全性や平凡性を支えているのは技法ではなく、松井ら(1990)が確立した神戸大方式の個別的实施方法に含まれている、病者の病理を暴こうとするのではなく、病理そのものを包もうとするさまざまな配慮や関与方法にほかならない。

今後の課題として、個別法による神戸大方式の正式な実施方法による調査によって、自分の気持ちに近い描画を並べる「配列」、一枚だけを彩色させる「選択彩色」、敬称選択などを通して、それらの表現内容と言語交流の拡がりとの関連やパーソナリティとの関連を調べていくことが必要である。また、今回は検証できなかったが、松井ら(1990)の示唆する「4つのパターンはそれぞれ『起』『承』『転』『結』として理解される」という、誘発線法で描かれる一連の4枚の描画内容に関連性がみられることについても、今後検証することが必要である。特に、松井ら(1991)が「病的なものを誘発しない安全性を有し、『平凡反応』的描画から出発して『ゆとり』『遊び』『ひねり』に向かっていく」と示唆している誘発線法の特徴である治療的变化がどのような場合に生じるのかについて、誘発線法の表現を時系列的調査によって、

それらの変化要因とパーソナリティ要因との関連について吟味していくことは臨床的に有益だと思われる。

筆者ら(2003)は、投影描画法の一定の判定基準を作ることはクライアントの描画内容の理解を助け、投影テストへの応用の可能性を拓くことを指摘したが、誘発線法の健常者の反応特徴を把握することは、病者の描画表現を理解することにもつながるとと思われる。また、誘発線法の描画表現のみならず、他の投影描画法の客観的な評定方法を確立していくためにも、先述した描画の印象評価や描画内容の分析の精度を高めていくこと、描画評定者の要因、描画後の質問(PDI; post drawing interrogation)内容や表現内容のフィードバック方法などについてもこれから研究を行っていく必要がある。

### 謝 辞

本研究について、多忙にもかかわらず技術的な援助をしてくれた目白大学心理学研究科臨床心理学専攻博士課程の土田恭史氏に深く感謝する。また、データ整理を手伝ってくれた大学院臨床心理学専攻修士課程の院生諸氏にも感謝する。

### 参考文献

- 青木健次(1979). 投影描画法研究の動向. 京都大学教育学部紀要, 25, 209-222
- 青木健次(1980a). 描画法における全体的印象について. 京都大学教育学部紀要, 26, 129-140
- 青木健次(1980b). 投影描画法の基礎的研究(第1報)―再検査信頼性―. 心理学研究, 51(1), 9-17
- 深田尚彦(1972). 描画心理学―序説―. 同志社女子大学 学術研究年報, 23(3), 14-26
- 深田尚彦(1980). 描画心理学の体系. 同志社女子大学 学術研究年報, 31(3), 295-309
- Friedman, A.F., Webb, J.T. and Lewak, R. (1989). Psychological assessment with MMPI. Lawrence Earlbaum Associates, Inc., Mahwah, New Jersey. [田中富士夫・監訳(1999). MMPIによる心理査定. 三京房]

- 後藤多樹子・中井久夫 (1983). “誘発線” (仮称) による描画法 芸術療法学会誌, 14-1, 51-56
- 今村友木子 (2004). 印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析 心理臨床学研究, 22 (3), 217-227
- 神宮英夫 (1996). 印象測定の心理学 川島書店
- 松井律子 (1990). 誘発線4枚法による精神疾患患者の適応レベルの予測. 神戸大学医学部紀要, 51 (4), 113-132
- 松井律子・鶴田真理・杉林稔・中井久夫 (1990). 誘発線法についての新しい方法と解釈について. 芸術療法学会誌, 21-1, 5-15
- 松井律子・中井久夫 (1991). 誘発線法における精神科患者と非病者の逆説的描画傾向. 芸術療法学会誌, 22-1, 15-22
- 松田美登子 (1997). 誘発線法におけるイメージと描画のタイプ分類 芸術療法学会誌, 28-1, 97-104
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 (1966). 自我と適応の関係についての研究 (1) — Self-Differential 作製の試み — 東京教育大学教育学部紀要 12, 85-106
- 関谷智行・田中勝博 (2004). 誘発線法の反応特徴における臨床指標に関する研究. 日本描画テスト・描画療法学会第14回大会抄録集
- 高田夏子・松田美登子・竹松志乃 (1992). 誘発線法の基礎研究Ⅱ—誘発されるテーマと描画法. 日本心理臨床学会第11回大会論文集, 334-335
- 高田夏子・松田美登子・竹松志乃 (1994). 誘発線法の基礎研究Ⅳ—青年期の男子例, 女子例の比較. 日本心理臨床学会第13回大会論文集, 428-429
- 高田夏子・松田美登子・竹松志乃 (1995). 誘発線法の基礎研究Ⅴ—4枚法と1枚法の一致と平凡反応について. 日本心理臨床学会第14回大会論文集, 400-401
- 田中勝博・原野広太郎 (1992). 思春期の登校拒否児および健常児群における自己概念に関する研究. 教育相談研究 Vol.30, 8-15, 1992
- 田中勝博 (1993). スクイグル法の実際. 臨床描画研究Ⅷ, 19-34
- 田中勝博 (2001). 非行を対象としたスクウイグル. 臨床精神医学2001年増刊号「芸術療法と表現病理」, 135-143 アークメディア
- 田中勝博・今野祐之・小佐野綾 (2003). 卵画と洞窟画の基礎研究 (1) — 楕円枠線画刺激による描画促進に関する研究 — 目白大学人間社会学部紀要, 3, 77-96
- 寺沢英理子・伊集院清一 (1994). いわゆる「知覚」の観点からみたロールシャッハテスト, ワルテッグテスト, 誘発線法の比較検討の試み. 芸術療法学会誌, 23 (1), 5-15

## A Study of Reactive Features of Elicitor Technique

— Through the Perspective of MMPI and SDS, Image Assessment —

Masahiro Tanaka    Mejiro University, Faculty of Human and Sciences

Hiroyuki Konno    Mejiro University, Faculty of Human and Sciences

Mejiro journal of Psychology. 2007 vol.3

### Abstract

This paper reports reactive features of elicitor technique that is one of the projective drawings with characteristics of low invasiveness. 151 undergraduate students participated in this study. The purpose of this study was to examine the relationship between personality traits (MMPI, SDS) and responses to four elicitor patterns. Moreover, the image assessment of the drawings of elicitor technique was executed. The result suggested that each elicitor pattern had its own responses and that personality trait related to response style. These findings are discussed in terms of clinical implications.

**Key words** : elicitor technique, projective drawings, MMPI(Minnesota Multiphasic Personality inventory), SDS(Self-rating Depression Scale), image assessment